

「任期を終える今、思うこと」



鎌田基予子教育委員

「今後ますます多様化していく社会、予測困難となる時代を生き抜いていかなければならない子どもたち」

私が8年前に教育委員を拝命したころから、成人式、卒業式、入学式などの祝辞ではもちろんのこと、このような寄稿文の中にも決り文句のように使われたフレーズです。この後には「だからこんな力を付けさせたい、こんな子に育ってほしい」と、それぞれの願いが語られていたわけですが、今現在、コロナ禍の世の中を生き抜いていかなければならないのは、まさに目の前にいる子どもたちであり、二度と戻れないかけがえのない日々学びを止めてはいけません。そんな待ったなしの状況下で教育に携わるものの使命は重く、とりわけ学校現場を任されている教職員の皆さんは、予測困難な日常に日々奮闘しながら、その先にある願う姿に向かって手探りで進んでおられるのが現状です。大変な世の中になってしまいました。

ただこのコロナ禍は皮肉なことに、行政、教育現場、PTA、そして地域と、それぞれの立場で「学校の役割とは何か」を真剣に考え、認識を新たにすることも与えてくれました。なかでも親御さんは実感として、学びの場がいつも当たり前場所に存在してくれていることに、これまで味わったことのない感謝の気持ちを持たれたのではないのでしょうか。また、子どもは自然に育つものという勘違いしがちですが、その育ちには環境が多大な影響を及ぼすことに、危機感を持たれた方も少なくないはずです。



さて、振り返って見ればあっという間の8年間でしたが、職務の中で一番手応えを感じたのは学校訪問だったように思います。子どもたちは本来学びたいと思っている。そして先生方は教えること、伝えることに喜びを見出して教職を目指した人たちである。そんな両者の思いが授業の中で見事に相まった場面に立ち会えたことが何度かあって、子どもたちが「わかった！できた！」を体験して自分の自信にしていけることが、学びの原点なのかもしれないと、そんなふうに思えるようになりました。



▲令和元年度 市議会総務文教委員と語る会の一場面

また、教育委員という立場を通して多くの方との出会いも経験させていただきました。人と人の繋がりが財産となり、人生を豊かにしてくれるのだと実感しています。本当にありがとうございました。

本年度の教育委員会視察研修は、正家廃寺の参考に

(教育総務課)

教育委員会では、国指定の史跡で正家廃寺跡の整備の参考となる史跡整備の研修を行いました。

関市では、平成6年から11年をかけて発掘調査を行った弥勒寺官衙遺跡群・弥勒寺跡を視察しました。郡衙を構成した施設が把握できるまれな遺跡として注目されています。史跡公園として歴史や文化を学び、市民の集いや憩いの場として利用できるように整備をされていました。

三重県鈴鹿市では、平成18年度から13年をかけて行い、令和元年度に事業が完了した伊勢国分寺跡の保存整備を視察しました。現地に立つと、建物の大きさや柱筋が揃えられ、計画的に建てられたことが、実感できました。今後の活用は歴史的価値やインフラの強みを活かしてさまざまな事業を展開して地域づくりにつなげていきたいと考えてみました。

当市の正家廃寺跡の保存管理に参考にしていきたいと思います。



▲弥勒寺跡で塔跡の説明を受ける

新しい時代の学びが始まる ～小中学生にタブレットを配布～

(学校教育課)

ICT（情報通信技術）教育の充実を図るため、市内小中学生に1人1台のタブレット端末の配布を始めました。これは、文部科学省が推進する児童生徒向けの1人1台の端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する「GIGAスクール構想」によるものです。

まず、最高学年である中学校3年生と小学6年生への配布が11月に行われ、残りの全ての学年には12月末に配布を終える予定です。これからは、タブレット端末を活用した新しい時代の学びが始まります。

この配布に先駆けて11月5日に、恵那東中学校3年生に一斉配布され、初めての操作体験が行われました。

授業の冒頭にタブレット端末を使う学習の説明が行われた後、各クラスの担任から3年生全員に手渡されました。真新しい箱から取り出されたタブレット端末で、生徒たちはカメラを使って写真を撮ったり、スケジュールを入力したりするなどして、その機能を確認合いました。生徒たちの自分専用端末として使える喜びあふれる姿が見え、新しい情報教育の活用に期待が膨らみます。

このタブレット端末には学習アプリケーションも入っており、これからは学びの場面でのICTの活用、家庭と学校をつなぐICTの活用を推進していきます。



▲慎重にタブレットを取り出します



▲カメラの確認。きれいに写るかな？



▲早速、スケジュールを登録